

建設産業委員会行政視察報告書

1 視察期間

令和6年8月21日から令和6年8月23日まで（3日間）

2 視察都市

- (1) 千葉県匝瑳市
- (2) 群馬県富岡市
- (3) 山梨県甲州市

3 参加者

戸塚邦彦委員長、八木義弘副委員長、加藤公人委員、柏木健委員、鈴木弥栄子委員、
加藤文重委員、

同行 金子和由 経済観光課 課長

随行 小笠原秀樹 主任

4 視察事項

- (1) カーボンニュートラルの取組について（匝瑳市）
- (2) 産業振興による市街地の活性化について（富岡市、甲州市）

5 考察

次のとおり

1. 匝瑳市 人口：33,437人・面積：101.48km²（令和6年7月1日現在）

1. カーボンニュートラルの取組について

<概要>

匝瑳市は、千葉県北東部に位置し、平成18年1月23日に八日市場市と匝瑳郡野栄町が合併して誕生した。市の北部は、谷津田が入り組んだ複雑な地形となっており自然が多く残されている。南部は、平坦地で田園地帯となっており、九十九里海岸に面している。気候は海洋性の温暖な気候で、夏は涼しく冬は暖かい過ごしやすい土地柄で、冬でもほとんど降雪はない。植木・苗木の産地として知られ、日本最大の栽培面積である。令和3年にゼロカーボンシティを表明し国の脱炭素先進地域指定を受けて農業を基幹産業とする同市の特色を生かした畑作営農型ソーラーシェアリング事業を開始した。

<考察>

大規模化が難しい中山間地での農業を下支えする手段としてソーラーシェアリング（農業収益と売電収入の複合経営）を位置づけ、太陽光発電設備の初期投資から農地の賃貸借、電力会社への売電などを事業運営会社（匝瑳みらい株式会社）が介在し、水はけの悪い関東ローム層が大半を占める同市の畑作地帯で土壌改良による規模拡大を図る一方、現行の大豆、麦作から、今後さらに耕地面積が広い水田への展開を模索していることがわかった。

ソーラーシェアリングに取り組む人材や農業者の育成、栽培技術の研究と知見の蓄積、市外との人的交流など、農業を基軸とした太陽光発電の普及促進を「ソーラーアカデミー事業」と名付け、官民連携の啓発活動にも積極的に取り組んでおり、匝瑳みらい(株)の椿社長によれば、遮光率の低い細型パネルの導入により、通常に比べ作物の生育劣化はほとんどみられず、猛暑ではむしろ遮光の利点がある。ソーラーシェアリングの対象作物として、お茶については昔から被覆茶があるように遮光の影響が少なく、磐田市でも北部地域ですでに導入例がみられるように、茶価の低迷などで苦境に立つ本市の茶農家の収益力向上に資する可能性が大きいと思われた。

ソーラーシェアリングは農業者の熱い思いから始まり、売電収入を活用して、安定した農業経営の実現、有機栽培への挑戦、耕作放棄地の再生、新規就農者や移住者支援などを行っており、この他、地域の課題を解決するために廃棄するものを有効活用する循環型社会を構築していることがわかった。磐田市は、年間日照時間が全国でトップクラスを誇り、太陽光発電の導入に最適な地域であり、ソーラーシェアリングに適した地域だと考える。

2.富岡市 人口：45,470人・面積：122.85km²（令和6年8月1日現在）

1 産業振興による市街地の活性化について

<概要>

富岡市は、群馬県南西部に位置する市で、明治初期に建てられた日本初の本格的な機械製糸の工場である富岡製糸場があることで知られ、2014年に富岡製糸場及び近隣の施設が「富岡製糸場と絹遺産群」として世界遺産に登録された。富岡市は、「富岡製糸場」という世界遺産を抱え、妙義山などの風光明媚な地域性から、以前から「景観」を大切にす風土があり、市内全域を景観計画が効力を発する区域である『景観計画区域』として定めている。また、富岡製糸場の周辺には、さらに積極的な景観形成を進めていくため、『富岡製糸場周辺特定景観計画区域』として定めており「富岡市にふさわしい景観」について市民の皆さんの共通認識を築くための計画策定がされていたが、開発型の区画整理事業から地域資源を活かしたまちづくりへ、大転換をした経緯がある。

<考察>

富岡市は、まちづくり手法の大転換として土地の買収の始まっていた「開発型の区画整理事業」から「地域資源を活かしたまちづくり」へと都市計画方針を変更した事に大変驚きを感じたが、方針転換前に取得した土地があり、市内の大地主は行政となったため、取得した物件を駐車場やポケットパークの整備などを行い外部からの人の流れを考えるまちづくりにしたこと、また、まちなか回遊性をつくる為にも活用しており、路面整備でカラー塗装や路地裏の石畳化は、本市におけるまちの回遊性に参考になると考える。

現在もレンガ作りの建物や機械など歴史的建造物の保存状態がよく観光地としての魅力を維持している。世界遺産効果による賑わいが一段落で観光客の減少もみられるが、富岡製糸場を核としたまちの回遊性による観光振興の取組や、地域住民の観光業への参加意識は磐田市も見習うべきであると感じた。

富岡製糸場を中心に「まちのタカラを活かして」として官民連携によるリノベーションまちづくりや景観や街並みなどまちづくり活動の全体的なコーディネートや中心市街地の活性化に関する業務をになう「株式会社まちづくり富岡」の設立など、行政と民間の連携協力により、スピード感を発揮し効果的に事業を実施してく取組は本市においても参考にすべきと考える。

3.甲州市 人口：29,221 人・面積：264.11 km²（令和 6 年 8 月 1 日現在）

1 産業振興による市街地の活性化について

<概要>

甲州市は、山梨県北東部に位置する市で、平成 17 年 11 月 1 日に、勝沼町、大和村、塩山市が合併して甲州市が誕生した。豊かな自然と恵まれた気候・風土を活かし、古くから果樹栽培や観光農園を中心とした農業が主要産業となっている。ワイン醸造が盛んで、甲州ぶどうと勝沼ワインの産地として知られているが、もも、サクランボ・いちご等も生産され、フルーツの一大産地である。ぶどうやワイン産業に関連する近代化遺産を整備・修復し、市内のワイナリーと結びつけた観光ルートを作り出し、官民が連携して観光資源の発掘に努めている。

<考察>

チャレンジショップ事業は、市が借入した駅前商店街の空き店舗を活用し、コワーキングスペースを起業した若者を中心に、まちのコミュニティーの形成や情報交換の場としての機能を果たしていると伺える。しかし、起業を促し如何に地元で店舗展開してもらうかの人材育成や、起業による開業時での空き店舗は住宅併用が多く、店舗としての貸出が困難であることなど課題も多いことが伺えた。

地域資源を活かした事業では、ワイナリーを結ぶ周遊ルートは、「ぶどうの丘」を中心に、近代産業遺産とワイナリーを結ぶフットパス整備やワインツーリズムの開催で地域の活性化に寄与していることが伺えた。

甲州市が運営する「ぶどうの丘」では、市の審査に合格した市推奨のワインを扱うワインショップや、地元産使用のレストラン、温泉・宿泊施設など様々な施設があり、特に地下のワインカーヴでは地元の 180 種類のワインが試飲でき、好みのワインを見つけそのワイナリーへ出向くという、ワインを核とした観光周遊ルートの整備を目指しており、地元の産業を有効に生かし、まちの活性化に結びつけていることが伺えた。磐田市においても多くの観光資源を活用し、ワクワクするようなイベント開催や核となるような資源を中心に市全体の活性化を図る事が必要であると感じた。